

06.10.2004

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日 2 0 0 3 年 1 0 月 1 0 日
Date of Application:

出 願 番 号 特 願 2 0 0 3 - 3 5 1 6 8 8
Application Number:

[ST. 10/C]: [J P 2 0 0 3 - 3 5 1 6 8 8]

出 願 人
Applicant(s):

内 田 龍 男
株式会社東北テクノブレインズ
財団法人21あおり産業総合支援センター

REC'D 02 DEC 2004

WIPO

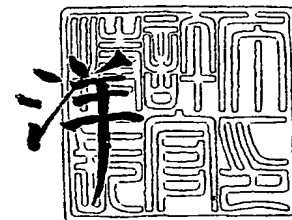
PCT

PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年11月18日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

小 川



出証番号 出証特 2 0 0 4 - 3 1 0 4 6 8 6

【書類名】 特許願
【整理番号】 KP150036
【提出日】 平成15年10月10日
【あて先】 特許庁長官 今井 康夫 殿
【国際特許分類】 G01N 21/59
G02F 1/13

【発明者】
【住所又は居所】 宮城県仙台市太白区八木山南1丁目9番地の23 松屋南八木山
207
【氏名】 宮下 哲哉

【発明者】
【住所又は居所】 宮城県仙台市宮城野区高砂2丁目1番11号
【氏名】 内田 龍男

【発明者】
【住所又は居所】 宮城県仙台市青葉区昭和町3-31 ヴィラ・サンタクララ60
6
【氏名】 石鍋 隆宏

【特許出願人】
【識別番号】 393024821
【氏名又は名称】 内田 龍男

【特許出願人】
【識別番号】 592235008
【氏名又は名称】 株式会社東北テクノブレインズ

【特許出願人】
【住所又は居所】 青森県青森市新町二丁目4番1号 青森県共同ビル7階
【氏名又は名称】 財団法人21あおもり産業総合支援センター

【代理人】
【識別番号】 100099531
【弁理士】
【氏名又は名称】 小林 英一

【手数料の表示】
【予納台帳番号】 018175
【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】
【物件名】 特許請求の範囲 1
【物件名】 明細書 1
【物件名】 図面 1
【物件名】 要約書 1

【書類名】 特許請求の範囲

【請求項 1】

応答特性のエリクセン-レスリー理論値と実測値とのフィッティングにより粘性係数の値を決定する液晶の粘性係数の測定方法において、ホモジニアス配向の液晶セルを測定対象として、まずオン応答特性を測定しその結果から回転粘性係数 γ_1 の値を決定し、次いでオフ応答特性を測定しその結果からミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 、 η_2 の値を決定することを特徴とする液晶の粘性係数の測定方法。

【請求項 2】

応答特性のエリクセン-レスリー理論値と実測値とのフィッティングにより粘性係数の値を決定する液晶の粘性係数の測定装置であって、液晶セルを照射する光源と、前記液晶セルへの印加電圧値を高低 2 値の双方向に切替え可能な電圧源と、前記光源から出て前記液晶セルを透過した光の透過率データを、前記電圧源の切替え時点から $100\mu s$ 以下の時間間隔で採取可能な透過率測定器と、前記電圧源の切替え方向が高方向のときの前記透過率測定器の採取データに、回転粘性係数 γ_1 を種々変えて計算した前記理論値をフィッティングさせて γ_1 の値を決定し、かつ前記電圧源の切替え方向が低方向のときの前記透過率の採取データに、ミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 および η_2 を種々変え γ_1 は前記決定した値に固定して計算した前記理論値をフィッティングさせて η_1 、 η_2 の値を決定する演算を実行可能な演算器とを具備したことを特徴とする液晶の粘性係数の測定装置。

【書類名】明細書

【発明の名称】液晶の粘性係数の測定方法および装置

【技術分野】

【0001】

本発明は、液晶の粘性係数の測定方法および装置に関し、特に、液晶の回転粘性係数 γ_1 およびミーソヴィッツ粘性係数のうち η_1 、 η_2 を高精度に測定できる測定方法および装置に関する。

【背景技術】

【0002】

近年、液晶テレビジョンの進歩に伴い、より高速でスイッチする液晶表示装置（Liquid Crystal Display：略号LCD。以下、適宜この略号で記す。）の開発が強く望まれている。本発明者らはこれまでに、LCDの応答には液晶のフロー効果が重要な役割を演じていることを明らかにしてきた（非特許文献1）。このフロー効果の理論は、エリクセン-レスリー（Ericksen-Leslie）により立てられたものである（非特許文献2～4）。この理論によれば、液晶を異方性粘性流体とみなして、連続弾性体理論を盛り込んだ流体力学系が、数1に示す運動方程式および数2に示す角運動量保存式（非特許文献5）により記述される。

【0003】

【数1】

運動方程式

$$\frac{d}{dz} \left\{ \alpha_2 \dot{n}_x n_z + \alpha_3 \dot{n}_z n_x + \left(\alpha_1 n_x n_y n_z^2 + \frac{1}{2} \alpha_3 n_x n_y + \frac{1}{2} \alpha_6 n_x n_y \right) \frac{\partial v_y}{\partial z} \right. \\ \left. + \frac{1}{2} \left(2 \alpha_1 n_x^2 n_z^2 - \alpha_2 n_z^2 + \alpha_3 n_x^2 + \alpha_4 + \alpha_5 n_z^2 + \alpha_6 n_x^2 \right) \frac{\partial v_x}{\partial z} \right\} = 0$$

$$\frac{d}{dz} \left\{ \alpha_2 \dot{n}_y n_z + \alpha_3 \dot{n}_z n_y + \left(\alpha_1 n_x n_y n_z^2 + \frac{1}{2} \alpha_3 n_x n_y + \frac{1}{2} \alpha_6 n_x n_y \right) \frac{\partial v_x}{\partial z} \right. \\ \left. + \frac{1}{2} \left(2 \alpha_1 n_y^2 n_z^2 - \alpha_2 n_z^2 + \alpha_3 n_y^2 + \alpha_4 + \alpha_5 n_z^2 + \alpha_6 n_y^2 \right) \frac{\partial v_y}{\partial z} \right\} = 0$$

 $\alpha_1 \sim \alpha_6$: Leslie の粘性係数

v: 速度ベクトル

n: 配向ベクトル

【0004】

【数2】

角運動量保存式

$$\gamma_1 \dot{n}_x = \gamma n_x - \frac{\partial F}{\partial n_x} + \frac{\partial}{\partial z} \frac{\partial F}{\partial \left(\frac{\partial n_x}{\partial z} \right)} - \alpha_2 n_z \frac{\partial v_x}{\partial z}$$

$$\gamma_1 \dot{n}_y = \gamma n_y - \frac{\partial F}{\partial n_y} + \frac{\partial}{\partial z} \frac{\partial F}{\partial \left(\frac{\partial n_y}{\partial z} \right)} - \alpha_2 n_z \frac{\partial v_y}{\partial z}$$

$$\gamma_1 \dot{n}_z = \gamma n_z - \frac{\partial F}{\partial n_z} + \frac{\partial}{\partial z} \frac{\partial F}{\partial \left(\frac{\partial n_z}{\partial z} \right)} - \varepsilon_0 \Delta \varepsilon \left(\frac{D_z}{n_z^2 (\varepsilon_{\parallel} - \varepsilon_{\perp}) + \varepsilon_{\perp}} \right)^2 n_z - \alpha_3 n_x \frac{\partial v_x}{\partial z} - \alpha_3 n_y \frac{\partial v_y}{\partial z}$$

 γ_1 : 回転粘性係数 $(\gamma_1 = \alpha_3 - \alpha_2)$ γ : 任意定数 D_z : 電束密度 ε_{\parallel} : 長軸方向の誘電率 ε_{\perp} : 短軸方向の誘電率 F : 歪みの自由エネルギー密度

$$F = \frac{1}{2} k_{11} (\Delta_{\parallel} \bar{n})^2 + \frac{1}{2} k_{22} \left(\bar{n}_{\parallel} (\nabla \times \bar{n}) + \frac{\pi}{\lambda_0} \right)^2 + \frac{1}{2} k_{33} (\bar{n} \times (\nabla \times \bar{n}))^2$$

 k_{11}, k_{22}, k_{33} : 弾性定数 λ_0 : らせんピッチ

【0005】

上記の数1式、数2式に含まれる係数 $\alpha_1 \sim \alpha_6$ は、レスリー粘性係数と呼ばれており、これらの間には、 $\alpha_6 = \alpha_2 + \alpha_3 + \alpha_5$ 、なる関係があるので、全6つのうち独立なものは5つである。しかし、これらは測定系との対応が不確定であるため原理的に直接測定することができない。一方、測定系との対応が確定している（すなわち原理的には測定可能な）粘性係数として、ミーソヴィッツ（Miesowicz）粘性係数が知られている。これには、図1に示すような、分子の短軸方向、長軸方向に平行なせん断フローに対する粘性係数（ずれ粘性係数） η_1 、 η_2 、分子の長軸回りのねじれ方向のフローに対する粘性係数（ねじれ粘性係数） η_3 、および分子の短径が圧縮される方向のフローに対する粘性係数（圧縮粘性係数） η_{12} の4つがある。これら4つに数2式中の回転粘性係数 γ_1 （これも測定可能）を付加した5つのパラメータと、レスリー粘性係数 $\alpha_1 \sim \alpha_6$ との間には、数3で表される関係があることが知られている。そこで、これら5つのパラメータの値を精度よく測定できれば、数3式を α について解いた数4式からレスリー粘性係数を算出し、その結果を用いて数1式、数2式をコンピュータによる数値解法で解くことにより液晶の応答性を正しく評価することができ、さらには、液晶材料の改善にも寄与することができる。

【0006】

【数3】

η : Miesovicz 粘性係数

$$\eta_1 = (-\alpha_2 + \alpha_4 + \alpha_5) / 2$$

$$\eta_2 = (\alpha_3 + \alpha_4 + \alpha_6) / 2$$

$$\eta_3 = \alpha_4 / 2$$

$$\eta_{12} = \alpha_1$$

$$\gamma_1 = \alpha_3 - \alpha_2$$

【0007】

【数4】

α : Leslie 粘性係数

$$\alpha_1 = \eta_{12}$$

$$\alpha_2 = -(\eta_1 - \eta_2 + \gamma_1) / 2$$

$$\alpha_3 = -(\eta_1 - \eta_2 - \gamma_1) / 2$$

$$\alpha_4 = 2\eta_3$$

$$\alpha_5 = (3\eta_1 + \eta_2 - 4\eta_3 - \gamma_1) / 2$$

$$(\alpha_6 = \alpha_2 + \alpha_3 + \alpha_5)$$

【0008】

従来知られている液晶の粘性係数の測定方法としては、TN液晶セルの電気応答特性を使って、前記5つのパラメータを同時に動かして得た計算値と実測値とのフィッティングにより最適なパラメータ値を探す方法がある（非特許文献6）。なお、圧縮に係るパラメータ η_{12} は、通常は無視してよいから、通常は同時に動かされるパラメータは4つである。また、回転粘性係数 γ_1 については、可動式の2つの表面に電圧を印加できる特殊な構造の回転粘性計を用いた測定方法が知られている（非特許文献7）。

【非特許文献1】S.Onda, T.Miyashita, T.Uchida: Asia Display 98 Proceedings(1998)p. 1055

【非特許文献2】F.M.Leslie: Quart. J. Mech, Appl. Math., 19(1966)p. 357

【非特許文献3】F.M.Leslie: Liquid Crystals(1968)p. 365

【非特許文献4】J.L.Ericksen: Mol. Cryst. Liq. Cryst. (1969)p. 153

【非特許文献5】C.Z. van Doorn: J. of Applied Physics, 46, 9(1975)p. 3738

【非特許文献6】O.Cossalter, B.Carmer, D.A.Mlynsky: J. of Physics 2, At. Mol. Cluster Phys. Chem. Phys. Mech. Hydrodyn. Vol. 6, No. 12(1996)pp. 1663-1669

【非特許文献7】K.Skarp, S.T.Lagerwall, B.Stebler: " Measurement of hydrodynamic parameters for nematic 5CB" , Molecular Crystal Liquid Crystal, Vol. 60(1980)pp. 215-236

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0009】

しかしながら、上記従来のフィッティングによる測定方法では、同時に変化させるパラメータが4つと多く、計算に時間がかかる上、精度が低いという問題があった。また、回

転粘性計を用いた測定方法では、回転粘性係数 γ_1 しか測定できず、しかもその精度は不十分である。すなわち、従来の技術では、LCDの応答性を支配する上記5つの粘性係数の測定方法が確立されていない。そこで、本発明では、その中でも応答速度に支配的な、回転粘性係数 γ_1 とミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 および η_2 をとりあげ、これらを容易にかつ高精度に測定しうる、液晶の粘性係数の測定方法および装置を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0010】

本発明者らは、上記目的を達成するために鋭意検討し、とくに、使用する液晶配向方式をホモジニアス配向とし、その電気光学応答特性を用いたフィッティング法を考究し、次の知見を得た。すなわち、ホモジニアス配向において、低電圧印加時は分子が基板にほぼ平行に並んでおり、この状態に、2枚の基板間に電圧を印加した時の配向変化では、ねじれ粘性係数は全く影響せず、また実効的にずれ粘性係数の影響はほとんどない。したがって、印加電圧を低電圧から高電圧にスイッチングしたときの応答特性は他の配向方式に比べ η_1 、 η_2 の影響を受けにくい。つまり、印加電圧を低電圧（例えば0V）から高電圧（例えば10V）に変化させたときの応答特性（オン応答特性）を用いることによりミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 、 η_2 およびねじれ粘性係数 η_3 がほとんど影響しない条件下で回転粘性係数 γ_1 のみを決定できる。なお、圧縮粘性係数 η_{12} は前述のように無視しうる（以下同じ。）。さらに、印加電圧を高電圧（例えば10V）から低電圧（例えば0V）に変化させたときの応答特性（オフ応答特性）を用いて η_1 、 η_2 が決定できる。この場合も η_3 は影響しないので無視できる。

【0011】

本発明は、上記知見に基いてなされたものであり、その要旨は次のとおりである。

(1) 応答特性のエリクセン-レスリー理論値と実測値とのフィッティングにより粘性係数の値を決定する液晶の粘性係数の測定方法において、ホモジニアス配向の液晶セルを測定対象として、まずオン応答特性を測定しその結果から回転粘性係数 γ_1 の値を決定し、次いでオフ応答特性を測定しその結果からミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 、 η_2 の値を決定することを特徴とする液晶の粘性係数の測定方法。

(2) 応答特性のエリクセン-レスリー理論値と実測値とのフィッティングにより粘性係数の値を決定する液晶の粘性係数の測定装置であって、液晶セルを照射する光源と、前記液晶セルへの印加電圧値を高低2値の双方向に切替え可能な電圧源と、前記光源から出て前記液晶セルを透過した光の透過率データを、前記電圧源の切替え時点から100 μ s以下の時間間隔で採取可能な透過率測定器と、前記電圧源の切替え方向が高方向のときの前記透過率測定器の採取データに、回転粘性係数 γ_1 を種々変えて計算した前記理論値をフィッティングさせて γ_1 の値を決定し、かつ前記電圧源の切替え方向が低方向のときの前記透過率の採取データに、ミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 および η_2 を種々変え γ_1 は前記決定した値に固定して計算した前記理論値をフィッティングさせて η_1 、 η_2 の値を決定する演算を実行可能な演算器とを具備したことを特徴とする液晶の粘性係数の測定装置。

【発明の効果】

【0012】

本発明によれば、他の粘性係数の影響が小さい電気光学応答特性を用いて、まず回転粘性係数を、次いでずれ粘性係数をフィッティングするようにしたから、測定精度を大幅に向上させることができ、また同時に変化させるパラメータが最大で2個と少ないため、計算時間を格段に短縮することができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【0013】

本発明では、測定対象である液晶セルとして、ホモジニアス配向としたものを用いる。ホモジニアス配向とは、低電圧印加時に分子が基板にほぼ平行に並ぶ配向をいう。ここで、ほぼ平行とは、液晶分子の長軸方向を基板に投影した時の方向がほぼ平行であるものを

指し、基板面からの傾斜角は土いずれかの符号の側に揃って $0 \sim 90^\circ$ の範囲にある状態を指す。なお、分子同士の方角角の差は絶対値で 10° 以内（好ましくは 2° 以内）とするのがよい。ここで、方位角とは、液晶分子の長軸が、基板面に平行に設けた基準軸に対してなす角度である。

【0014】

ホモジニアス配向の液晶セルでは、オン応答特性に対する回転粘性係数以外の粘性係数の影響は無視し得る程度に小さい。そこで本発明では、まず第1ステップとして、オン応答特性を測定しその結果（実測値：または実験値ともいう。）にエリクセン-レスリー理論値（以下、単に理論値または計算値ともいう。）をフィッティングさせることにより回転粘性係数 γ_1 の値を決定する。なお、測定対象とする液晶セルのセルギャップは、特に限定されないが、光学特性の変化を複屈折特性の変化や、透過率の変化として検出するために、好ましくは $2 \sim 10 \mu\text{m}$ である。

【0015】

オン応答特性は、オン切替え時すなわち液晶セルに対する印加電圧値を低電圧から高電圧に切替えたときの電気光学応答特性であり、該オン切替え時点からの液晶の透過率の経時変化により表される。ここで、高電圧としては、周期 10ms 以下の方形波の交番電圧を用いるのがよい。印加電圧値（交番電圧の振幅が該当）は特に限定されないが例えば 10V が好ましく用いる。また、低電圧としては、一定電圧 0V または高電圧と同じ周期の方形波でその振幅（印加電圧値）を高電圧よりも低い適宜の値とした交番電圧が好ましく用いる。

【0016】

オン応答特性の実測値とフィッティングさせる理論値を計算する際には、回転粘性係数 γ_1 のみを種々変化させて計算する。なお、他の粘性係数は初期値として他の液晶材料の値（文献に載っている一般的な値）を入れておく。この計算方法は、前記の数1式および数2式を数値的に解き、その経時的に変化する配向の計算結果を用いて透過率の経時変化を計算するというものである。なお、偏光子を直交させた場合、透過率 T の計算には式： $T = \sin^2(\pi \times \delta / \lambda_0)$ を用いる。ここで、 λ_0 は測定する光の波長、 δ は液晶セルのリタデーションである。

【0017】

このように、第1ステップでは、計算値の計算条件と実験値の測定条件との双方を、回転粘性係数 γ_1 の影響が他の粘性係数とは独立に現れうる、互いに整合した条件としているので、計算値と実験値のフィッティングにより決定された回転粘性係数 γ_1 の値は、従来のフィッティングによるものに比べ、より正確なものとなる。

【0018】

次に、第2ステップとして、第1ステップと同じ液晶セルのオフ応答特性を測定しその実験値に計算値をフィッティングさせることによりミーンヴィッツのずれ粘性係数 η_1 、 η_2 の値を決定する。オフ応答特性は、オフ切替え時すなわち液晶セルに対する印加電圧値を高電圧から低電圧に切替えたときの電気光学応答特性であり、該オフ切替え時点からの液晶の透過率の経時変化により表される。第2ステップでは、印加電圧の切替え方向を第1ステップとは逆方向すなわち高電圧側から低電圧側に向かう方向とするが、この点を除けば印加電圧の形態および低電圧側、高電圧側の印加電圧値は第1ステップと同じでよい。

【0019】

このオフ応答特性に対して、ねじれ粘性係数 η_3 、圧縮粘性係数 η_{12} の影響は、無視し得る程度に小さいから、実験値とフィッティングさせる計算値を計算する際には、ミーンヴィッツのずれ粘性係数 η_1 、 η_2 を種々変化させて、第1ステップと同様の方法で計算する。なお、回転粘性係数 γ_1 は第1ステップで決定した値に固定し、また、ねじれ粘性係数 η_3 、圧縮粘性係数 η_{12} は第1ステップと同じ値を入れておく。

【0020】

このように第2ステップでは、計算値の計算条件と実験値の測定条件との双方を、ミ-

ソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 、 η_2 の影響が他の粘性係数とは独立に現れうる、互いに整合した条件としているので、計算値と実験値のフィッティングにより決定されたミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 、 η_2 の値は、従来のフィッティングによるものに比べ、より正確なものとなる。

【0021】

また、応答特性の計算において、同時に変化させるパラメータが、第1ステップでは1個、第2ステップでは2個と、従来のフィッティングでの4個に比べて少ないから、計算を2ステップに分けたことによる時間増分を考慮しても、計算時間は格段に短縮する。

【0022】

なお、第1ステップで仮に用いた η_1 、 η_2 が、第2ステップの結果と大きく異なる場合は、第2ステップで得られた η_1 、 η_2 を用い、再度第1ステップの手続と第2ステップの手続を行うことにより、高精度化が可能である。

【0023】

本発明の測定方法を効率的に実施するためには、例えば図2に示すような測定装置を用いるのが好適である。図2において、1は液晶セル10を照射する光源である。光源1は白色光源、単色光源等々のいかなる光源でもよい。なお、液晶セル10の入射側、出射側には偏光子11、12が配置される。2は電圧源であり、これは、液晶セル10への印加電圧値を高低2値の双方向に切替え可能なものであればよく、通常の2値電源およびスイッチング素子を用いて容易に構成できる。

【0024】

3は透過率測定器であり、これは、光源1から出て偏光子11、液晶セル10、偏光子12を順次透過した光の透過率データを、電圧源2の高低2値の双方向への切替え時点から100 μ s以下の時間間隔で採取可能なものが好ましい。透過率データの採取時間間隔が100 μ sよりも大きいと、透過率の時間分解能が粗くなってフィッティングの精度が低下する場合があるからである。透過率測定器3は、例えばフォトマルチプライアやフォトダイオード等の光検出器および、AD変換器、デジタルオシロスコープ等を組合わせて構成できる。

【0025】

4は演算器であり、これには、通常のコンピュータに、透過率測定器3の採取した透過率データに対して本発明に係る2ステップのフィッティング演算を行う機能を搭載したものが好ましく用いうる。この2ステップのフィッティング演算は、上述のように、電圧源2の切替え方向が高方向のとき（第1ステップ）の透過率データに、回転粘性係数 γ_1 を種々変えて計算した計算値をフィッティングさせて γ_1 の値を決定し、さらに、電圧源2の切替え方向が低方向のとき（第2ステップ）の透過率データに、ミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 および η_2 を種々変え γ_1 は第1ステップで決定した値に固定して計算した計算値をフィッティングさせて η_1 、 η_2 の値を決定するというものである。

【0026】

なお、電圧源2の切替えタイミング、および透過率測定器3のデータ採取開始タイミングは、同期制御することが好ましい。この同期制御は、演算器4としてコンピュータを用いる場合はそのコンピュータで行うようにしてもよく、あるいは別途適宜に設けた同期制御手段により行ってもよい。

【実施例】

【0027】

液晶材料にはTD1016XX（チッソ（株）製）を、配向膜にはAL1254（日本合成ゴム（株）製）を用いてホモジニアス配向の液晶セル（セルギャップ：6 μ m）を作製し、本発明の測定方法により応答特性を測定した。測定装置としては図2のように構成したものを用いた。印加電圧は高側を周期1ms、振幅10Vの方形波の交番電圧とし、低側を一定電圧0Vとした。図3に第1ステップ（オン応答：a）、第2ステップ（オフ応答：b）の実験値と計算値のフィッティング結果を示す。このフィッティングで決定された粘性係数は、 $\gamma_1=131\text{cP}$ 、 $\eta_1=145\text{cP}$ 、 $\eta_2=12\text{cP}$ であった。なお、1cP（：センチ

ポアズ) = 1 mPa · s である。

【0028】

続いて、これら決定した値の信頼性を確かめるため、ホモジニアス配向とはフローの影響が反対方向であるベンド配向の液晶セルを作製し、その応答特性の計算値と実験値との比較を行った。その結果を図4に示す。図4において(a)はオン、(b)はオフの応答特性であり、実線は前記決定した値を用いてフローを考慮した計算値、点線はフローを無視した計算値である。図4より明らかなように、本発明の測定方法で測定した粘性係数を用いてフローを考慮した計算値は、忠実に実験値を再現した。

【0029】

さらに、フローを無視した計算では、例えば図5に示すように、各種液晶セルについて応答時間のセルギャップ依存性を計算してみても、実験値との一致具合は必ずしも良いとはいえず、しかもオン応答(a)とオフ応答(b)とで実験値とのずれの傾向も一貫していなかったのに対し、本発明の測定方法で測定した粘性係数を用いてフローを考慮した計算では、例えば図6に示すように、実験値との一致具合が格段に良好なものとなることもわかった。なお、図5、図6において、TNはツイストネマティック液晶セル、HANはハイブリッドアラインドネマティック液晶セル、ECBは電界制御型複屈折モードの平行配向の液晶セル、BENDはベンド配向の液晶セルであり、また、応答時間は、オン応答の場合、透過率が0%から立ち上がって90%に達するまでの時間、オフ応答では、透過率が100%から立ち下がって10%に達するまでの時間とした。

【産業上の利用可能性】

【0030】

本発明は、LCDの設計、製造や評価等に係る産業に利用することができる。

【図面の簡単な説明】

【0031】

【図1】ミーソヴィッツ粘性係数と流れ(フロー)の状態との対応関係を示す説明図である。

【図2】本発明に係る測定装置の好適例を示す模式図である。

【図3】実施例での実験値と計算値のフィッティング結果を示すオン(a)およびオフ(b)応答特性図である。

【図4】ベンド配向の液晶セルでの計算値と実験値との比較を示すオン(a)およびオフ(b)応答特性図である。

【図5】従来のフローを無視した計算による応答時間のセルギャップ依存性を実験値と比較して示した計算-実験比較対照図である。

【図6】本発明に則ってフローを考慮した計算による応答時間のセルギャップ依存性を実験値と比較して示した計算-実験比較対照図である。

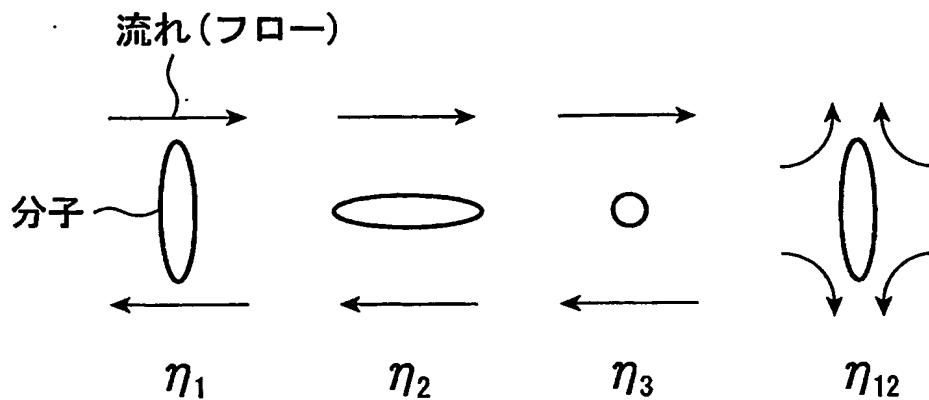
【符号の説明】

【0032】

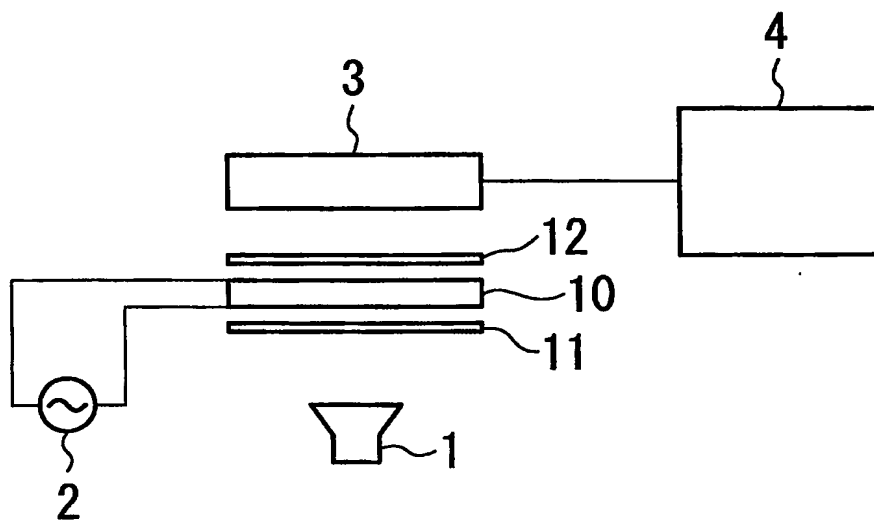
- 1 光源
- 2 電圧源
- 3 透過率測定器
- 4 演算器
- 10 液晶セル
- 11、12 偏光子

【書類名】 図面

【図 1】

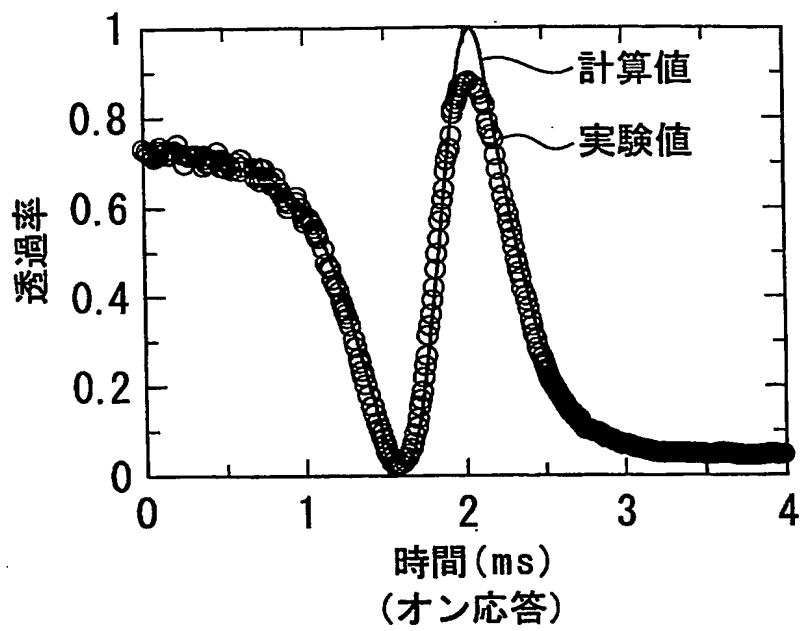


【図 2】

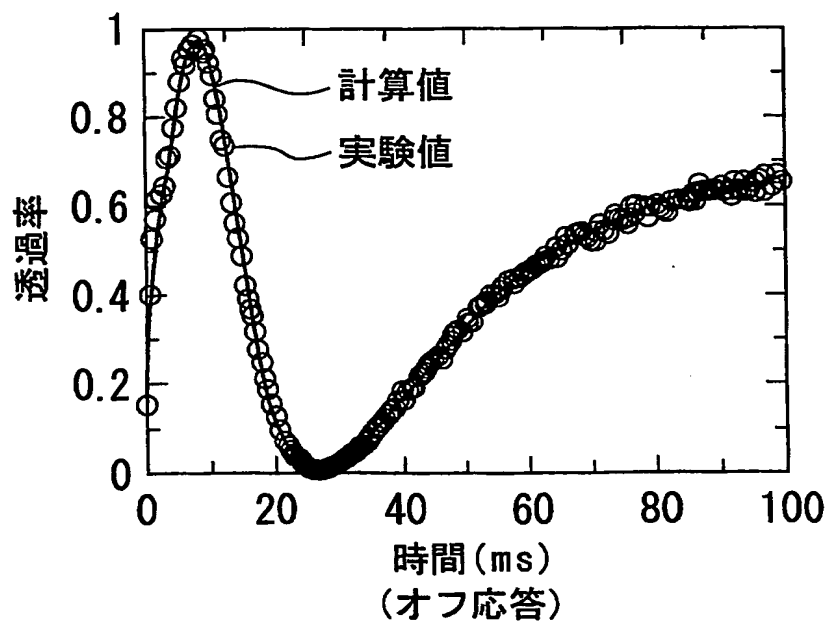


【図 3】

(a)

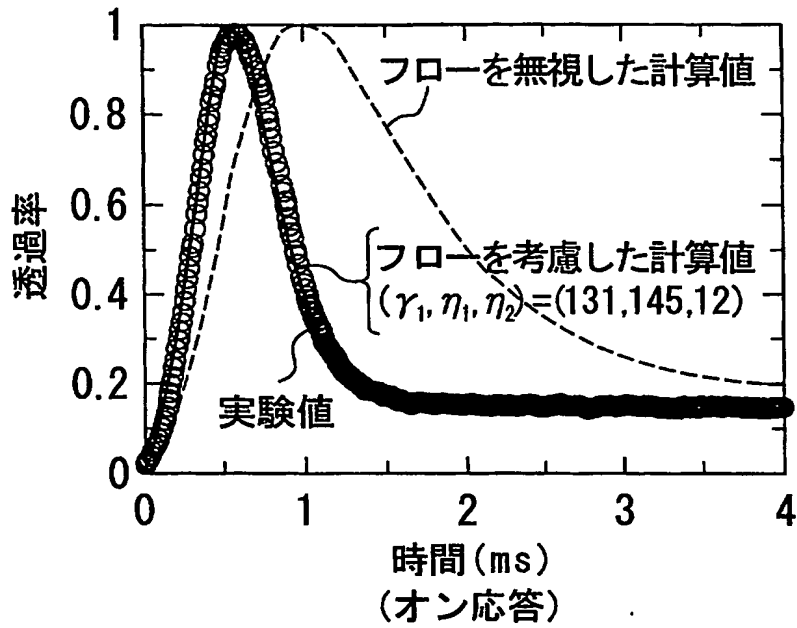


(b)

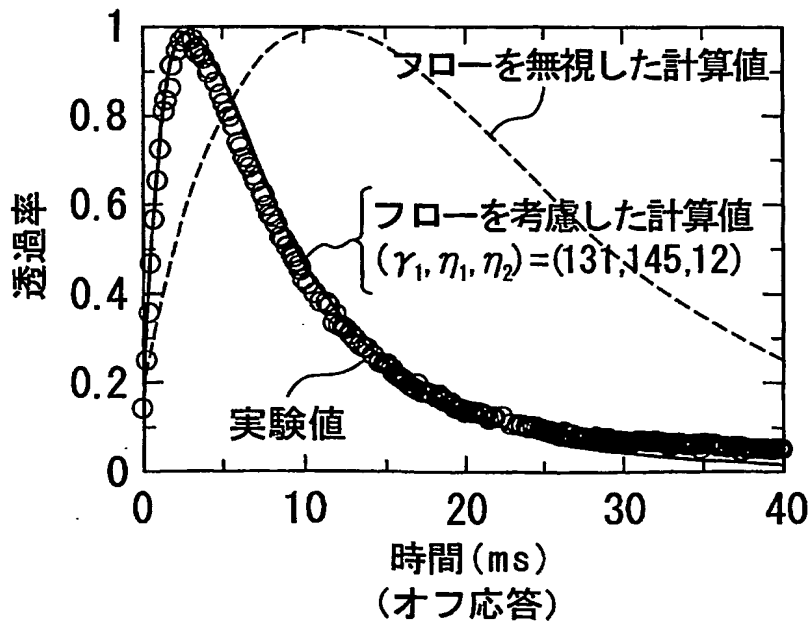


【図 4】

(a)

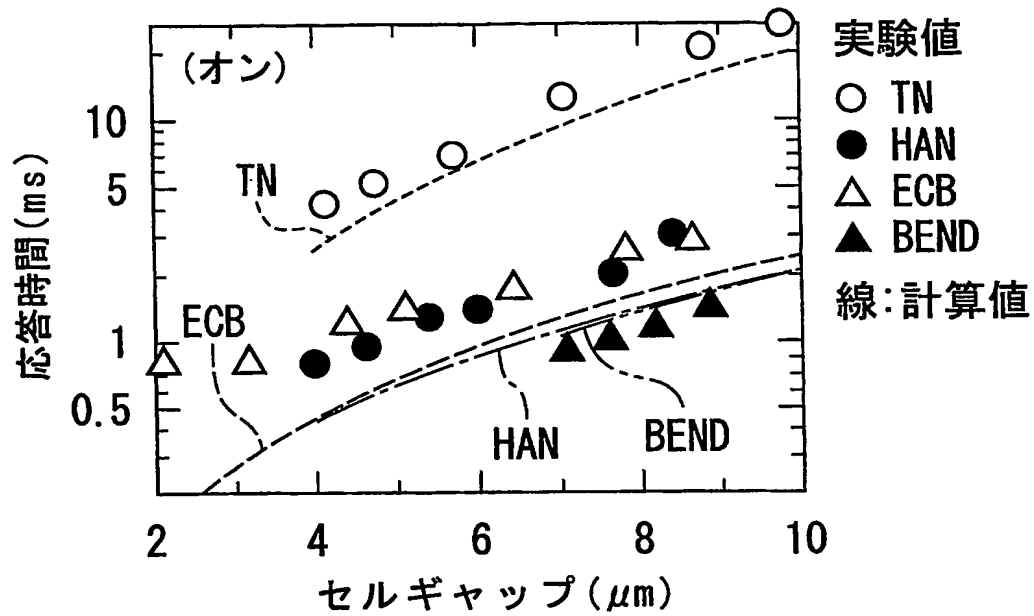


(b)

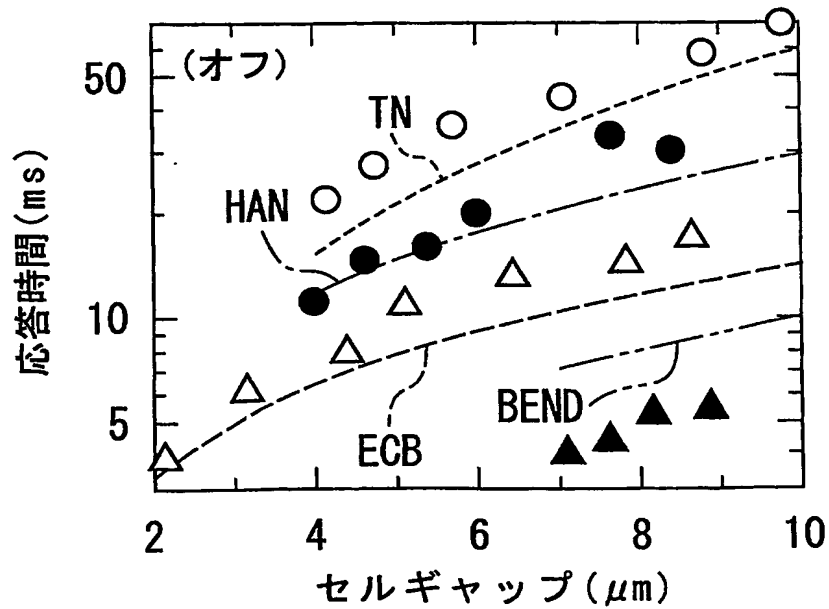


【図 5】

(a)

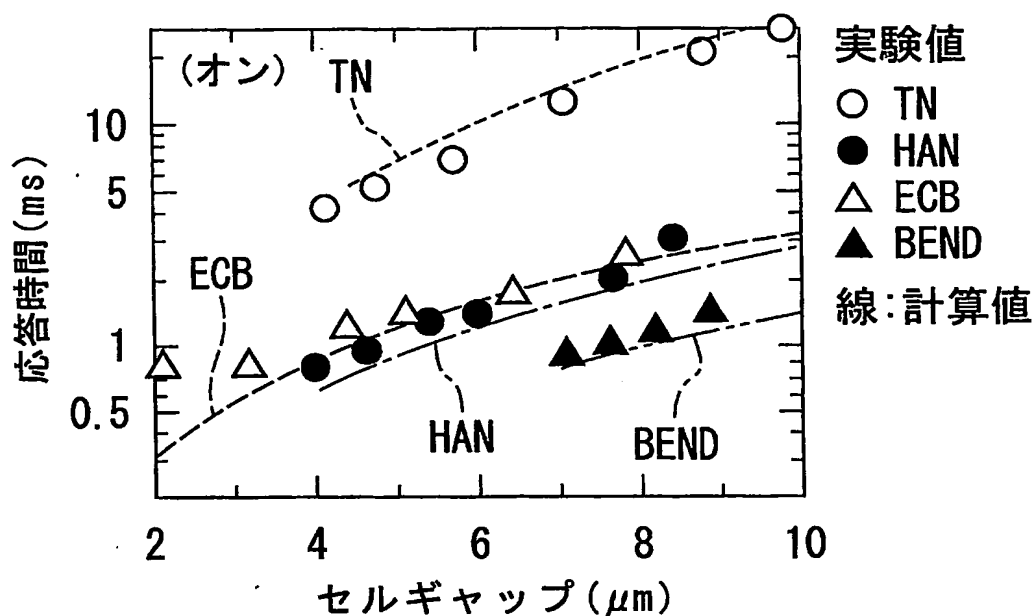


(b)

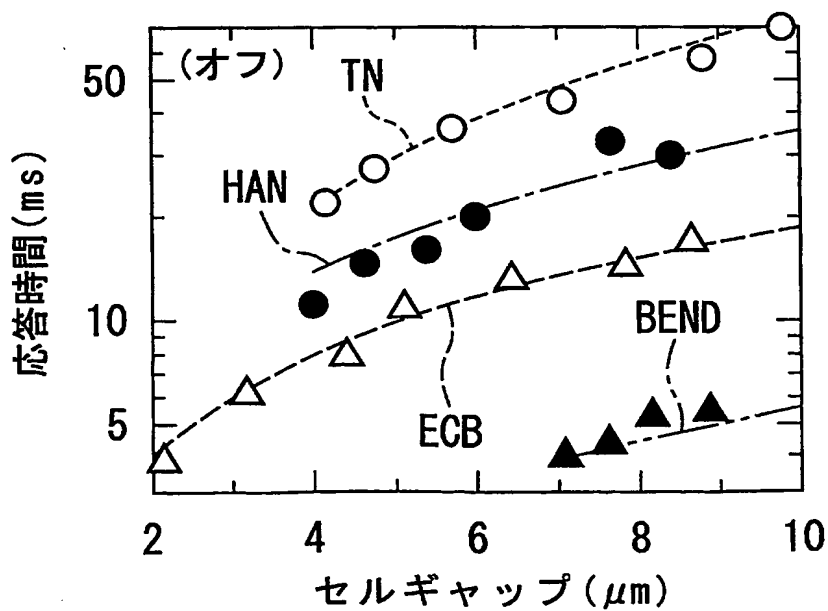


【図 6】

(a)



(b)



【書類名】 要約書

【要 約】

【課 題】 応答速度に支配的な、回転粘性係数 γ_1 とミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 および η_2 を容易にかつ高精度に測定しうる、液晶の粘性係数の測定方法および装置を提供する。

【解決手段】 応答特性のエリクセン-レスリー理論値と実測値とのフィッティングにより粘性係数の値を決定する液晶の粘性係数の測定方法において、ホモジニアス配向の液晶セル10を測定対象として、まず第1ステップとしてオン応答特性を測定しその結果から回転粘性係数 γ_1 の値を決定し、次いで第2ステップとしてオフ応答特性を測定しその結果からミーソヴィッツのずれ粘性係数 η_1 、 η_2 の値を決定する。第1ステップの計算では γ_1 以外の粘性係数は一般的な値を用いておく。第2ステップの計算での γ_1 には第1ステップで決定した値を用いる。

【選択図】 図 4

認定・付加情報

特許出願の番号	特願 2003-351688
受付番号	50301691136
書類名	特許願
担当官	鎌田 枢規 8045
作成日	平成 15 年 10 月 22 日

< 認定情報・付加情報 >

【特許出願人】

【識別番号】	393024821
【住所又は居所】	仙台市宮城野区高砂二丁目一番地の 1 1
【氏名又は名称】	内田 龍男

【特許出願人】

【識別番号】	592235008
【住所又は居所】	宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉無番地
【氏名又は名称】	株式会社東北テクノブレインズ

【特許出願人】

【識別番号】	503354044
【住所又は居所】	青森県青森市新町二丁目 4 番 1 号
【氏名又は名称】	財団法人 21 あおもり産業総合支援センター

【代理人】

申請人	
【識別番号】	100099531
【住所又は居所】	千葉県船橋市本町 6 丁目 1 番 7 号 エスペランサ K 4 階 小林特許事務所
【氏名又は名称】	小林 英一



特願 2003-351688

出願人履歴情報

識別番号

[393024821]

1. 変更年月日

1993年10月29日

[変更理由]

住所変更

住所

仙台市宮城野区高砂二丁目一番地の11

氏名

内田 龍男



特願 2003-351688

出願人履歴情報

識別番号 [592235008]

1. 変更年月日	1992年11月13日
[変更理由]	新規登録
住 所	宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉無番地
氏 名	株式会社東北テクノブレインズ



特願 2 0 0 3 - 3 5 1 6 8 8

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [5 0 3 3 5 4 0 4 4]

1. 変更年月日	2 0 0 3 年 9 月 2 9 日
[変更理由]	新規登録
住 所	青森県青森市新町二丁目 4 番 1 号
氏 名	財団法人 2 1 あおもり産業総合支援センター